

【平群「金勝寺の蓮」】

平群町金勝寺様の境内に咲く「蓮の花」を拝見してきました。写真は7/12（土）の午前9時半頃に撮ったものです。この他に、白色や淡紅色など、見事な色合いでした。中には、花が開ききってしまったものや、花びらが落ちてしまっていたものも見られたのですが、この花は、両掌（りょうてのひら）でそおっと包み込めるような、とても美しく優しい形をしていました。そして、朝日が演出する見事なコントラストによって、まるで浮き上がっているように見えました。



さて、ピンク色の蓮の花の花言葉は、ずばり「信頼」です。この優しい色合いが、心を穏やかにし、安心感を与えてくれることから「信頼」という意味が込められているとの事です。

【夏本番】

子どもたちにとって待ちに待った「夏休み」が始まります。私も子どもの頃は、「やったー！明日から夏休み、何して過ごそうかなあ・・・」と一学期の終業式の日の夜は、身体中からウキウキしたそんな気分に包まれていました。

夏休みは、これまでの学校という場から、家庭や地域へと、子どもたちの生活の舞台が広がります。子どもたちにとって、自らの興味と関心に根ざした体験を深める絶好の機会であり、次なる成長への種となります。この夏にしか出来ない・味わえない貴重な体験や経験を通し、子どもたちの感性がぐんぐんと高まるよう、よろしくお願いいたします。

【町教育委員会主催 夏のイベント】 ※ 詳細を平群町教育委員会ホームページに掲載中

（1）平群町水泳教室（対象：小学生のみ 3年生以上）

本町夏の伝統行事の一つです。その歴史はとても長く、お父さん・お母さん方の中で小学生当時に参加されていた方もおられることと考えます。

今年は梅雨開けが早く、その後猛暑が続いており、子どもたちはプールに入れることを、とても楽しみに登校してきていました。その笑顔が本当に印象的でした。

さて、昨年度は「熱中症警戒アラート」の影響から、同教室を半分以上中止せざるを得ない状況となりました。そこで、今年は、午前中の実施を原則に、教室指導担当者とスケジュールを調整したところ、土日を含めて3週間にまたがる日程となりました。今年も、安全かつ有意義な活動となるよう努めてまいります。ご理解ご協力の程、よろしくお願いいたします。



○ 日程：①7/19～/21、②7/26～/27、③8/4～5、6日が予備日

○ 会場：平群小プール

（※7/17 現在状況：70名あまりの参加希望）

(2)「2025 ワールドツアー in Heguri ～ココロとカラダで世界を感じよう～」

○ 対象：小学校3年生～6年生、中学校全学年

○ 日時：7月29日（火）10:00～12:00 於：町総合文化センターくまがしホール他）

〈開催の趣旨〉

これは、今年度から新たに開設するプログラムです。

私は、過去の仕事で、外国の子どもたちや多くの方々との交流の機会を得て、今まで見たことも味わったこともない、とても貴重な経験をする事が出来ました。そして、もっと世界を知りたい、もっとたくさんの人々とふれあってみたいという衝動（強い思い）にかられました。



たとえ、言葉の壁があろうとも、人の温もりや気持ちの表し方、人の事を思いやり考えることは世界中の誰もが大切にしていることを実感しました。何より、人それぞれが持つ魅力に引き込まれていったからです。

ただ、どの交流事業でも痛切に感じたのが、「もっと言葉（英語）が巧みに使えたらなあ」ということや「自分の気持ちを通訳なしに伝えたり会話できたりしたい！」という悔しさでした。

これからの未来社会を歩む子どもたちには、世界という舞台で、人と人とがつながりあい、共存しあうために、互いを理解する「力」が、さらに求められるであろうと考えます。

そのためには、「英語等」の語学力を身につけることに対し、学校での学習だけではなく、自らの意思と行動力により、積極的な学びを推し進めていくことがとても大切です。

そこで、私たち教育委員会では、本町の子どもたちに対し、世界にふれる機会を提供したいと考え、今回のプログラムを企画しました。「全く英語なんてわかんないなあ・・・」で大丈夫。世の中全て「それって何？」から始まるのです。「さあ、とにかくやってみよう!!」

〈プログラム内容〉

町内で活躍中のALT3名を含む総勢9名のALTにご参加いただき行います。

ゲームやクイズなどを織り交ぜ、ALTの自国のくらしや学校・授業の様子などの紹介を、参加者が小グループに分かれて尋ねて回ります。

そして最後は、それぞれのグループごとに、紹介された事柄等について発表や意見を交流しあうという企画です。

この様子は、次号でお伝えします。

※ 今回のこの企画は、応募多数により7/13で募集を締め切りました。申し訳ありません。

(3)「2025 へぐりこどもサミット」～Heguriをここからうごかそう！～

○ 対象：小学校3年生～6年生、中学校全学年

○ 日時：7月29日（火）13:30～15:30 於：町総合文化センターくまがしホール他）

〈開催の趣旨〉

今から約10年前に始めた企画です。町内の小・中学生が集まり、共通するさまざまな課題について考えあう場として「こどもサミット」と名付け取組を開始しました。

第一回目は「どうすればもっと学校が楽しく・充実したものになるか!」というテーマのも

と、各学校からの参加者が3つのグループに分かれ、中学生の進行役のもと、いろいろなアイデアや意見を出し合いました。「いじめをなくす方法」「もっと楽しくなる学校行事」などさまざまなものでした。そしてここで出た意見を各自の学校に持ち帰り、それぞれの学校でできることにについてさらに具現化を図っていきました。

ここ最近のテーマでは「SDGs」や「防災」について考えたりしています。

〈プログラム内容〉

今年のテーマは「H e g u r i をここからうごかそう！」と題し、今年の「へぐり時代まつり」に実行委員として参加してくださった高校生・大学生をゲストに迎え、このイベントに参加してみようと思った動機やきっかけ、実際に参加してどうだったかなど、生の声を聞きながら、これからのこの町を担う自分たちにはどのようなことが出来るのかを語り合う場を設定します。

子どもたちは、誰もみな「無限の可能性」を秘めています。その力を引き出してやること、そして、これまで気づかなかった「自分」に出会ってほしいと願い開催します。

今年も、参加者の「熱いトーク」を大いに期待しています！ V(^ ^)V

※ 現在参加者は小中学生あわせて13名です。まだ余裕がありますので、さらなる参加をお待ちしています！

※ 上記（2）及び（3）のイベント（プログラム）については、保護者の方々の参観も可能となっております。是非子どもたちの様子をご覧になってください。

【子どもたちに伝えたいメッセージ その2】 ※前号シリーズ第2弾です

「新プロジェクトX『`廃校寸前からの逆転劇、』～高校生と熱血先生の宇宙食開発～（NHK放送番組より）

○ 前号に続き、テレビ番組からの紹介ですが、この番組は、今年の5月31日（土）に放送されました。番組がどんどん進むにつれ、私は、その展開にくぎ付けになりました。

年齢（とし）のせいか、最後は感動で涙腺が崩壊状態でした。

○ 熱血先生と教え子たちが、四半世紀の時間（とき）をかけて取り組んだ末に完成させた大事業。どうぞご覧ください！！

【あらすじ】 ※番組をご覧になった方は、この部分をとばして先にお進みください。

舞台は、福井県立小浜水産高校（以下「浜水」（はますい）」と記載）。2001年4月、この物語の主役でもある小坂康之先生が、新任教師として「浜水」に着任したところから話が始まります。

小坂先生は、学生時代に自身が取り組んだスキューバダイビングの経験から得た感動を、子どもたちにも是非とも味わわせたいとの夢を抱き、単身神奈川県から「浜水」にやって来ました。と言うのも、「浜水」は1895年（明治28年）我が国の水産高校として第一番目に設立された歴史と伝統のある学校だったからです。しかし、そこで待ち構えていたのは、生徒が授業中であるにも関わらず床に寝そべっていたり、昼休みにベランダでタバコを吸う生徒がいたり、荒れの極限状態にありました。全く自分には見向きもしない子どもたちとの距離感の隔たりなど、理想と現実のギャップの大きさに完全に打ちのめされてしまいました。

そんなある日、小坂先生は、一人の先輩教師の生徒と接する姿にヒントを得ました。また、毎年の伝統行事である文化祭における地元の方々への「サバ缶」販売で見せる子どもたちのいきいきとした姿から、「子どもたちは皆、偏差値で測れない力を持ち備えている」という事に気づかされ、子どもたちへの声掛けをはじめ、接し方や寄り添い方・向き合い方など、全てにおいてこれまでと180度変えていきました。

さらに、地域の方々（漁師さんや水産関係者等）にお願いし、校外での体験学習の機会に取り組むなどの体当たりの教育に対し、子どもたちの心に変化が起きはじめ、小坂先生への信頼感が芽生えていきました。

そしてある日、当時の受け持ちクラス3人の女子生徒から、地元の海で大量発生している「エチゼンクラゲ」によって漁師さんたちが被害を受け大変困っている事を聞きつけ、その対策に是非とも取り組みたいとの相談を受けます。子どもたちは、いろいろ研究しエチゼンクラゲからコラーゲンが採れることや、クラゲ体内に含まれている「にがり成分」を使って「豆腐作り」に取り組む事など、毎日放課後遅くまで残って研究し続け見事に達成させます。そして、その取組を北陸の水産高校大会で発表したところ見事最優秀賞受賞に至りました。「県内で最も荒れていたあの『浜水』が……」この快挙は学校だけではなく地元の人たちにとっても誇りとなりました。そして、この取組こそが後の「宇宙食開発（「サバ缶」）」にまで至る長い道のりへの「原点（礎）」とも言えるものとなったのです。

その後も、その志を受け継いだ後輩たちが、次々と自らの意志と意欲で新たな研究に取り組んでいきました。2年後に始まった海の水質を海藻で改善する研究では、生徒の研究に付き添い寝る間も惜しんでレポートをチェックしました。そして遂に全国水産高校が競う大会の頂点に立つ快挙を成し遂げました。しかし、優勝した生徒が卒業後、小坂先生に「会社に行けなくなった」という一本の電話をかけてきました。そして、その生徒はこう付け加えます。「先生みたいな人がいなければ僕は何もできない」と。小坂先生は、優勝を目指すために生徒のレポートを真っ赤に修正していました。

この男子生徒の一本の電話によって、小坂先生は、自分のこれまでの教育理念や方法の何が間違っていたのか、何が足りなかったについて必死で振り返り模索されます。一度は教師を辞職することになって思いつめながら。そして……。

「これまでの自分（小坂先生）は、『生徒が先で失敗することや転ぶことがないように、絶えず成功への後押しをしたり、先回りして困難に遭遇せぬように手招きしてあげたりすることが大切。』

『そうすれば、子どもたちの嬉しい顔を見ることが出来る。』』と言い聞かせ取り組んできた。しかし、それは大きな間違いであり、自分よがりな考えであった。何よりも大切にすべきことは、『失敗から学ぶ』』ということだ。人として本当に育たねばならない真の強さは、『逆境から這い上がる』こと、這い上がるためには何が必要なのかを考える事』だ。私は、子どもたちにそのことを教えてこなかった。」

「教えるのではなく、ともに考える教育への転換」

こうして、小坂先生は自身の教育スタイルを足元から見直し、真の子どもの為の教育はすべてが成功に導くことではなく、時として「失敗」や「遠回りしている」と思えることであったとしても、そこから自分で修正することに気づき取り組む力を育てること、そのために子どもたちに寄り添いともに歩いていく教育に邁進（まいしん）されます。そして、「サバ缶」が宇宙へとは旅立つ取り組みが始まります。折しも「浜水」が県の学校統合による方針で「廃止」が決定される中で……。

廃校決定を寸前で救ったのは、「浜水」の子どもたちの変容を見守り一緒になって教育活動を支援し協力してきてくれた、地元小浜市の町の方々でした。あの漁師さんや水産関係者、地域団体の方々を中心に、「学校を残したい」という署名活動が始まり、卒業生や地元の人々も支援に加わった県教育委員会との協議の結果、小浜水産高校は県立若狭高校の「海洋科学科」として再出発することが決定しました。この結果、水産学校としての道がつながれるとともに、『サバ缶』を宇宙に飛ばそうのプロジェクトも、つなぎ留められたのでした。

研究はその後、何度も何度も試行錯誤を繰り返しました。しかし、決して諦めることなく、この強い思いと取組は先輩から後輩へと受け継がれました。

そして、2020年、国際宇宙ステーション（ISS）で、宇宙飛行士・野口聡一さんが「世界で初めて日本の高校生が宇宙食として開発したサバ缶をいただきます。」「おいしいー！」というコメントとともに口にする映像が、宇宙から全世界に送り届けられました。

それは、地元の方々と文化祭で製造販売した「サバ缶」が「若狭宇宙鯖缶」として宇宙へ飛び立ち完成した瞬間でもありました。

「浜水」のある生徒が口にした『サバ缶』を宇宙に飛ばせるんちゃう？というひと言から15年、そして、小坂先生が「浜水」に着任し、この子どもたちには「無限の可能性」があると信じ、子どもたちとともに歩んできたところから「四半世紀」、次々と、子どもたちがバトンを渡し続けてきた「大事業」の完成でした。

この番組を見終わった後、私の身体中を「感動」という熱い血が駆け巡っていました。

ビデオにまで納め何度も繰り返し見ました。たくさんの言葉をノートにメモしました。

以下は、あらすじの中でもつづった言葉の数々です。

- ◆「子どもたちには、偏差値だけで測れない力、がある」
- ◆「時に失敗し、時に成功。そうしたところに、本当の学び、がある。それが学びの一番大切なところ。向き合っている事柄や課題が難しければ難しいほど、とにかく考えなければならぬ。諦めるのではなく考える。そこに、成功への扉、がある。」
- ◆「地域は、子どもたちに教えてやろうではなく、一緒にやろうと取り組むところ。そうやって取り組んだ子どもたちは、必ず地域（ふるさと）に帰って来る。地域に帰って来たいと思う子どもたちを作っていく。そうやって、これからも住民として支えていきたい。」
- ◆「子どもを待つことは難しくとても労力のいること。待つとは、信じること。教師が、この子はどうせだめだ、と諦めてしまうと、誰も救うことは出来ない。子どもと一緒に悩み、考え、そうやって前に進む。それが教育だ。」

子どもたちに是非伝えたい、先生方に是非知ってもらいたい、そして、保護者や地域の方々と是非とも共有したい、「言葉の数々」であり「考え方」だと思っています。

子どもがもつ「無限の可能性」を導き出し、輝かせることができる。それが「教育」であり子どもを見守り・育てていく「原点」だと。

この番組から大きなメッセージを受け取ることが出来ました。

皆様、暑い夏が続きます。健康管理にはくれぐれもご留意ください。

子どもたち、元気にいい夏を過ごしましょう！！

